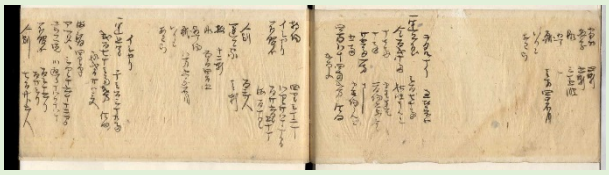
第1章　松浦武四郎の旅

松浦武四郎は文化15（1818）年、伊勢国一志郡須川村（現在の三重県松阪市）に生まれました。生家は、伊勢神宮の近くにあり、お伊勢参りの人びとが行きかっていました。子どもの頃は、旅行ガイドのような名所図会に夢中になり、旅に憧れをもっていたようです。武四郎は、文政13（1830）年13歳のときに、津の平松楽斎に入門し、学問を学びましたが、16歳のときに1ヶ月ほど家出をし、江戸で過ごしました。このときに、篆刻を学んだといわれています。17歳になった武四郎は東北から九州まで日本中を訪問する旅へ出発します。21歳のときに、長崎で病に倒れ、それを期に出家をしました。26歳のとき長崎の津川文作から蝦夷地のロシア南下の危機を聞き、蝦夷地に興味を持ち、調査することを決意しました。

旅の記録

武四郎は、野帳（のちょう）と呼ばれるメモ帳に旅先で目にしたこと、聞いたことを書き記しています。訪れた場所の風景などを描くこともありました。後日、そのメモを元にまとめた報告書を幕府に提出し、蝦夷地の地図や日誌などを執筆しています。また、兄・佐七や恩師の平松楽斎などに宛てた書簡も多く残されています。

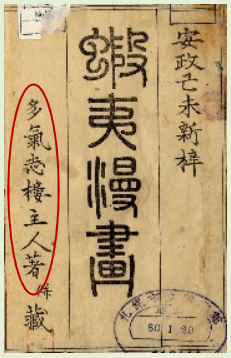


「蝦夷地野帳」松浦武四郎自筆史料（1）

武四郎の名前

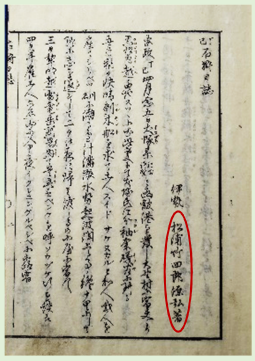
武四郎は幼名を「竹四郎」といいます。名は「弘」、字は「子重」といいます。そのほかにも、長崎で僧侶をしていたときには「文桂（ぶんけい）」と改名し、２回目の蝦夷地調査のときには「雲平」と名を変えていました。

武四郎の刊行物には、「多気志楼主人」、「北海道人」というペンネームが、幕府のお雇いの頃には「源弘」、明治政府の役人の頃には「阿倍弘」という署名がみられます。また、晩年には「馬角斎」とも名乗っていました。



多気志楼主人
『蝦夷漫画』

北海道人
『聖跡二十五霊社順拝双六』



伊勢　松浦竹四郎源弘
『石狩日誌』

松浦開拓判官阿倍弘
『北海道国郡略図』